参考資料６－１

次期学習指導要領に向けたこれまでの審議のまとめ（素案）

（平成２８年８月１日教育課程部会教育課程企画特別部会資料３－１）

（言語能力関係抜粋）

○　また、急速に情報化が進展する社会の中で、情報や情報手段を主体的に選択し活用していくために必要な情報活用能力[33]、物事を多角的・多面的に吟味し見定めていく力（いわゆる「クリティカル・シンキング」）、統計的な分析に基づき判断する力、問題を見いだし解決に向けて思考するために必要な知識やスキルなどを、各学校段階を通じて体系的に育んでいくことの重要性は高まっていると考えられる。

○　さらに、体験から学び実践する力や、多様な他者と協働する力、学習を見通し振り返る力なども、学習を充実させ、社会生活で生きる資質・能力として重要である。

○　まとめれば、教科等の枠を越えて、すべての学習の基盤として育まれ活用される資質・能力と、それを育むために各教科等共通で重視すべき学習活動については、以下のようなものが考えられる。

・言語能力（読解力や語彙力等を含む）・・・言語活動を通じて育成
・情報活用能力・・・言語活動や、ＩＣＴを活用した学習活動等を通じて育成
・問題発見・解決能力・・・問題解決的な学習を通じて育成
・体験から学び実践する力・・・体験活動を通じて育成
・多様な他者と協働する力・・・「対話的な学び」を通じて育成
・学習を見通し振り返る力・・・見通し振り返る学習を通じて育成

○　こうした資質・能力についても、それぞれを三つの柱に沿って整理し、教科等の関係や、教科等の枠を越えて共通に重視すべき学習活動との関係を明確にし、教育課程全体を見渡したカリキュラム・マネジメントを通じて確実に育んでいくことができるようにすることが重要である。ここでは例示的に、言語能力と情報活用能力について整理するが、その他の資質・能力についても、同様の整理を行い、学習指導要領等や解説に反映させることが求められる。

①言語能力

（言語能力の育成が求められる背景）

○　育成すべき資質・能力の中でも、言語能力は、子供たちの学習や生涯にわたる生活の中で極めて重要な役割を果たすものである。

○　子供は、乳幼児期から身近な人との関わりや生活の中で言葉を獲得していき、発達段階に応じた適切な環境の中で、言語を通じて新たな情報を得たり、思考・判断・表現したり、他者と関わったりする力を獲得していく。教科書や教員の説明、様々な資料等から新たな知識を得たり、事象を観察して必要な情報を取り出したり、自分の考えをまとめたり、友達の思いを受け止めながら自分の思いを伝えたり、学級で目的を共有して協働したりすることができるのも、言葉の役割に負うところが大きい。

---

[33] 論点整理補足資料３５～３７ページ参照。

○　このように、言葉は、学校という場において子供が行う学習活動を支える重要な役割を果たすものであり、すべての教科等における資質・能力の育成や学習の基盤となるものである。したがって、言語能力の向上は、学校における学びの質や、教育課程全体における資質・能力の育成の在り方に関わる重要な課題として受け止められる必要がある。

（育成する言語能力の明確化）

○　言語能力を構成する資質・能力を、「知識・技能」、「思考力・判断力・表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱に沿って整理をすると、以下のようになると考えられる。

（知識・技能）

言葉の働きや役割に関する理解、言葉の特徴やきまりに関する理解と使い分け、言葉の使い方に関する理解と使い分け、言語文化に関する理解、既有知識（教科に関する知識、一般常識、社会的規範等）に関する理解が挙げられる。

特に、「言葉の働きや役割に関する理解」は、自分が用いる言葉に対するメタ認知に関わることであり、言語能力を向上する上で重要な要素である。

（思考力・判断力・表現力等）

テクスト[34]（情報）　を理解したり、文章や発話により表現したりするための力として、情報を多角的・多面的に精査し構造化する力、言葉によって感じたり想像したりする力、感情や想像を言葉にする力、言葉を通じて伝え合う力、構成・表現形式を評価する力、考えを形成し深める力が挙げられる。

（学びに向かう力、人間性等）

言葉を通じて、社会や文化を創造しようとする態度、自分のものの見方や考え方を広げ深めようとする態度、集団としての考えを発展・深化させようとする態度、心を豊かにしようとする態度、自己や他者を尊重しようとする態度、自分の感情をコントロールして学びに向かう態度、言語文化の担い手としての自覚が挙げられる。

○　特に、「思考力・判断力・表現力等」や「学びに向かう力、人間性等」を整理するに当たっては、「創造的・論理的思考」、「感性・情緒」、「他者とのコミュニケーション」の三つの側面から言語能力を構成する資質・能力を捉えている。

○　言語能力については、言葉に関わる知識・技能や態度等を基盤に、これら三つの側面の力を働かせて、テクスト（情報）を理解したり文章や発話により表現したりする能力として整理できるものと考える。

---

[34] 本審議のまとめにおいては、文章、及び、文章になっていない断片的な言葉、言葉が含まれる図表などの文章以外の情報も含めて「テクスト（情報）」と記載する。

○　また、言語能力を構成する資質・能力は、①テクスト（情報）を理解するための力が、「認識から思考へ」という過程の中で働き、②文章や発話により表現するための力が、「思考から表現へ」という過程の中で働いている。

ア）テクスト（情報）を理解するための力

・テクスト（情報）の構造と内容を把握し、精査・解釈し、考えを形成する力である。

・「構造と内容の把握」、「精査・解釈」、「考えの形成」のそれぞれの段階において、「知識・技能」や「思考力・判断力・表現力等」に整理された資質・能力が働いている。

特に、既有知識・経験によってテクストにない内容を補足・精緻化するなどして推論することや、共通－相違、原因－結果、具体－抽象等の情報と情報の関係性（論理）を吟味・構築すること、妥当性、信頼性等を吟味することなど、情報を多角的・多面的に精査し構造化する力は、テクストの意味を、字句通りというだけでなく理解するために重要な能力である。

イ）文章や発話により表現するための力

・表現するテーマ・内容、構成・表現形式を検討しながら、考えを形成・深化させ、文章や発話によって表現する力である。

・「テーマ・内容の検討」、「構成・表現形式の検討」、「考えの形成・深化」、「表現」のそれぞれの段階において、「知識・技能」や「思考力・判断力・表現力等」に整理された資質・能力が働いている。

・特に、表現した後、又は、表現しながら、考えを形成・深化させ、より良い表現にするために、文章を推敲したり、発話を調整したりする力が重要である。

○　言語能力は、その要素である資質・能力を、こうした過程の中で働かせることによって育成されるものである。こうした過程の繰り返しは、言語活動を通じて行われるため、言語能力の向上を図るためには、発達段階に応じた適切な言語活動を充実することが必要である。

○　言語活動については、現行の学習指導要領の下、すべての教科等において重視し、その充実を図ってきたところであるが、今後、「主体的・対話的で深い学び」を実現する学習・指導改善を進めるためには、より一層、言語活動の充実を図り、すべての教科等の学習の基盤である言語能力を向上させることが必要不可欠である。

○　特に言葉を直接の学習対象とする国語教育及び外国語教育の果たすべき役割は極めて大きい。言語能力を構成する資質・能力やそれらが働く過程、育成の在り方を踏まえながら、改善・充実を図ることが必要である。

○　そのためには、国語教育及び外国語教育において、発達の段階に応じて育成すべき資質・能力を明確にしながら、言語活動を通じて育成することが必要である。また、

学習評価や高校・大学の入学者選抜においても、言語活動を通じて身に付いたそうした資質・能力を評価していくようにすることが重要である。

②情報活用能力、情報技術を手段として活用する能力

（情報活用能力の育成が求められる背景）

○　グローバル化や情報化等の変化が加速度的となる中で、とりわけ最近では、「第４次産業革命」ともいわれる、進化した人工知能が様々な判断を行ったり、身近な物の働きがインターネット経由で最適化されたりする時代の到来が、社会の在り方を大きく変えていくとの予測がなされているところである。

○　教育界には、そのような将来の予測がますます難しい社会においても、子供たちが情報を主体的に捉えながら、何が重要かを主体的に考え、他者と協働しながら新たな価値の創造に挑み、社会の活性化と個性や能力を活かした人生の充実を実現していくことできるよう、必要な資質・能力を育成していくことが求められる。また、インターネットを通じて情報を得たり、文章の作成や編集にアプリケーションを活用したり、メールやソーシャルネットワークサービスを通じて情報を共有することが社会生活の中で当たり前となっている中で、情報技術を手段として活用していくことができるようにしていくことも重要である。

○　こうした観点から、情報や情報手段を主体的に選択し活用していくために必要な情報活用能力を、各学校段階を通じて体系的に育んでいくことの重要性は高まっていると考えられる。

（育成する情報活用能力の明確化）

○　情報活用能力とは、世の中の様々な事象を情報とその結びつきとして捉えて把握し、情報及び情報技術を適切かつ効果的に活用して、問題を発見･解決したり自分の考えを形成したりしていくために必要な資質・能力のことであり、これまで「情報活用の実践力」「、理解」「情報社会に参画する態度」の３観点と８要素に整理されてきている。

○　こうした情報活用能力を、教育課程を通じて系統的に育んでいくためには、論点整理において示された「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱に沿って再整理をする必要がある。この点を踏まえて、情報活用能力を資質･能力の三つの柱に沿って再整理すると、以下のようになると考えられる。

（知識・技能）
情報と情報技術を活用した問題の発見･解決等の方法や、情報化の進展が社会の中で果たす役割や影響、情報に関する法･制度やマナー、個人が果たす役割や責任等について、情報の科学的な理解に裏打ちされた形で理解し、情報と情報技術を適切に活用するために必要な技能を身に付けていること。

（思考力・判断力･表現力等）